

第1分科会

研究発表

発表者：石井 卓也（大阪府立刀根山支援学校 教諭）
 小山 輝雄（大阪府立刀根山支援学校 指導教諭）
助言者：中東 朋子（京都市教育委員会事務局指導部総合育成支援課参与）
司会者：三澤 誠一（大阪府刀根山支援学校 首席）

テーマ 「主体的・対話的で深い学び」につながる授業づくり

1 研究課題設定の趣旨

主体的・対話的で深い学びにむけた授業改善についての考察と、今後の課題について、当校での実践を報告し、全体で考えていきたい。

2 仮説実験授業の取組み

(1) 仮説実験授業とその運営方法

- ① 歴史
- ② 特徴

(2) 仮説実験授業の体験と実践報告

- ① 授業書の説明
- ② 授業のプロセス
 - ア 一般的な仮説実験授業のプロセス
 - イ： 少人数学級だからこそできること
 - ウ 病弱教育で気をつけること
- ③ 実践報告と体験
 - ア 子どもたちの反応と感想
 - イ 子どもたちの思考の統計

(3) 成果

- ① 主体的・対話的で深い学びの考察
 - ア 指導要領改定の趣旨
 - イ 学びを通して実現したい子どもの姿
 - ウ 主体的・対話的で深い学びを意識した授業の評価
 - エ 実践の考察

(4) 今後の課題

- ① 「授業の評価」と「授業改善」についての考察
 - ア 関連書籍の紹介
 - イ チェックリストの活用
 - ウ 客観的評価と主観的評価
 - エ まとめとして

3 ICT機器の活用について

(1) 360度カメラによる本校校舎の紹介

(2) ICT機器の環境整備について

① 基礎的環境整備

- ア 1人1台のパソコン・車いすの高さに合う机
- イ 無線LANの整備
- ウ 病室でもインターネットが使えるように病院に依頼

② 合理的配慮

- ア 個々の障がいの状態にあった入力装置を整備
〈例〉 スクリーンキーボード、トラックボールマウス、リングマウス
ゲームコントローラーのアナログスティック、ペンタブレット
音声入力ソフト、視線入力装置、タッチスイッチ
- イ ニーズに合ったアプリケーションの活用
〈例〉 エクセル、Webページ制作、音声編集、動画編集、イラストレーター
フォトショップ、3DCG、ビデオ通話、ビジュアルプログラミング

(3) オリジナルゲーム作りの実践（高等部 情報の授業）

① ビジュアルプログラミングのScratchを活用し、オリジナルのゲームを制作

- ア ゲームの企画
- イ キャラクターづくり
- ウ BGMや効果音などの演出
- エ プログラム
- オ ゲームバランスの検証

② オリジナルゲームで刀根山版eスポーツとしてゲーム大会

- ア 他者のプレイを客観的に観察
- イ 他者の意見を聞く
- ウ ゲームをよりいいものに改良

(4) 成果と今後の課題

① 成果

- ア ICT機器活用の技術向上
- イ 表現力が豊かに
- ウ 作品を通じて他者との対話生まれ、主体的に行動するように
- エ 論理的思考、計画性の向上

② 今後の課題

- ア ICT機器を活用できる教員の育成
- イ 機器の整備・更新
- ウ 将来の仕事との関係性

4 討議の柱

(1) 「主体的・対話的で深い学び」に関連した各校での取り組み

(2) 「主体的・対話的で深い学び」を実践するために必要なこと

第2分科会

研究発表

発表者：田端 友梨（和歌山県立みはま支援学校 教諭）

助言者：天田 美恵（滋賀県立小児保健医療センター療育部 作業療法士）

司会者：森 由起（和歌山県立みはま支援学校 教諭）

テーマ 「感覚から運動へ」～『みる・きく』の授業を通して～

1 研究課題設定の趣旨

本校は、和歌山県で唯一の病弱教育を行う特別支援学校である。隣接の独立行政法人国立病院機構和歌山病院に入院している重度重複障害児15名の教育を行っている学部について述べたい。障害は、脳性まひなど多岐にわたり、気管切開12名、酸素吸入4名、人工呼吸器装着6名、病棟内対応11名というように、障害が重度重複化している児童生徒が増え、子どもの実態等を理解する難しさがある。

私たちは、児童生徒と日々接する中で、一人一人が彩り豊かな人生を歩んでほしいと願う。そのためには、好きなことを楽しむ、人とコミュニケーションをとる、自分のしたいことを要求できる等の力を育てていきたいが、日々の教育活動で、一人一人の実態を的確に把握した上で授業を行っているのかと悩むことがある。

そこで、学部研修として、『重症心身障害児の認知発達とその援助』（片桐和雄、北島善夫、小池敏）より、まず感覚系機能を客観的に把握する必要があるということに注目し、『感覚から運動への高次化理論』（宇佐川浩）、『認知発達と感覚について』（広島県立福山支援学校自立活動ガイドブック）等を参考にし、『感覚から運動へ』をテーマに理解を深めていった。

2 重度重複障害のある児童生徒への取組について

(1) アセスメントを用いての実態把握

『重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト』（広島県立福山特別支援学校）を活用し、個々により受容しやすい感覚刺激があることや、1ヶ月から6ヶ月という発達の初期段階にいる児童生徒が多いこと等の大まかな実態を把握できた。

(2) 発達の初期段階に目を向ける（資料からの研修）

発達の初期段階での特徴として、視覚や聴覚が十分に育っておらず、成熟が早い前庭覚・固有覚・触覚といった感覚刺激が受容しやすいこと、感覚を使っているときは運動を自発しにくくなったり、運動を起こすと感覚を使いにくくなったりすることが挙げられる。このことから、児童生徒の課題として、まずは、感覚刺激に気づき意識を向けることが課題であると考えられる。様々な感覚刺激を提示し、そのときの児童生徒の感覚刺激の受容・処理・表出の仕方を見極めていく必要がある。

①感覚刺激の受容・処理を促す指導のポイント

ア 前庭覚、固有覚、触覚へのアプローチや感覚刺激の入れ方の工夫

イ 刺激をシンプルに整理・環境の整備

ウ 繰り返しの提示により過去の記憶と照合・判断

②表出を促す指導のポイント

ア 表出を十分に待ち、見逃さない

イ 適切なフィードバック

(3) 授業に向かう準備

障害の重い児童生徒にとって、まずは、授業に向かう身体の準備が整っているかを確認と個に応じた対応を大切に行った。また、学校PTと連携し、感覚刺激を受け取りやすい姿勢作りを個々に応じて考えていった。

3 『みる・きく』の授業での取組について

今回、授業の中で、学部で研修してきた障害の重い児童生徒への発達に合った働きかけを行い、目標の達成とさらなる児童生徒の実態把握へとつなげていった。

(1)各教科等を合わせた指導『みる・きく』の目標

『みる・きく』は、教科の国語や算数で培う力の初期の段階(いろいろな言葉に触れる、言葉による関わりを受け止める、物の有無や身の回りの物の数や形や量の大きさに気づく、等)と、自立活動の主に④環境の把握⑥コミュニケーション等を目標に置いた授業であり、絵本の読み聞かせを発展させた、お話遊びという方法で取り組んでいる。

(2)教材『スイミー』を通して気づいてほしいこと

内容の繰り返しによる期待感、独特な詩や絵の持つ世界観の体験、提示された教材そのものや大きさ長さなどへの気づき、それらを通しての教師とのやりとりをねらいたい。

(3)教材や提示の仕方の工夫

- ①視覚へのアプローチ(ブラックライト、コントラスト、適度な大きさ)
- ②大きさに気づける工夫(小さいスイミー、大きいまぐろ、遠くから近くへ)
- ③長さに気づける工夫(長くて重いうなぎが身体を這う感覚)
- ④触覚へのアプローチ(くらげの冷たく柔らかい感触、身体のどこで触るか)
- ⑤聴覚・固有覚へのアプローチ(登場音、カスタネットで挟まれる感覚)
- ⑥見る聴く触るを分けて提示、児童によって時間をかける部分の変更

(4)授業の改善点

①『スイミー』を行って気づいた点

ア 初期感覚へのアプローチは、どの児童生徒も気づきがよくわかりやすい。

イ 教材そのものから鳴る単純な音に気づきがよく、より見たい気持ちや触りたい気持ちを引き出せるのではないかと。

②次の単元、お話『ねこのピート～大好きな白いくつ～』での工夫点

ア ベッドを揺らす活動を取り入れ、前庭覚へのアプローチを行った。

イ 猫の小さい靴と大きい靴に気づけるよう、それぞれの靴の教材が身体の上を進み、大きさを身体で体感できるようにした。

ウ 教材そのものから音が鳴るようにし、気づきを促した。

4 成果と今後の課題

(1)成果

①初期感覚にアプローチすることで、児童生徒の表出につなげることができた。

②授業時間内や単元内で繰り返して教材を提示することで、児童生徒の表出に変化が見られた。驚き緊張→慣れ受け入れる→おもしろい(笑顔、追視等)

③実態の理解につながり次に目標とできるものが見えてきた。見るだけ、聴くだけ、触るだけ→聴きながら見ることの芽生え

④揺れ・冷覚・単純な音等、受け取りやすい感覚刺激を確認できた。

⑤児童生徒それぞれに気づきやすい感覚刺激があるとわかり、いろいろな感覚からアプローチする大切さを実感した。

⑥教材を介して人とのやりとりにつながった。

(2)今後の課題

教師の捉え方の違いを改善するために、同じ教材ややり方を介して授業を行ったり、ビデオ観察や記録表を有効に活用し、それらを元に話し合ったりすることで、共通理解を図り、児童生徒の実態把握をより確かなものにしていきたい。

5 討議の柱

(1)重度重複障害のある児童生徒の実態把握についての視点や方法

(2)授業での工夫点

第3分科会

研究発表

発表者：上野 英彦（三重県立かがやき特別支援学校 教諭）

助言者：平賀 健太郎（大阪教育大学教育学部 准教授）

司会者：瀬尾 佳与子（三重県立かがやき特別支援学校 教諭）

テーマ 「入院生徒の言語能力向上と心の成長を目指す国語科の学習指導」

1 研究課題設定の趣旨

(1) 本校の概要

平成29年4月、三重県立緑ヶ丘特別支援学校、三重県立城山特別支援学校草の実分校、津市立高茶屋小学校・南郊中学校あすなろ分校の3校が統合され、三重県立かがやき特別支援学校として開校した。緑ヶ丘校を本校とし、草の実分校とあすなろ分校の3校で構成される。

本校（緑ヶ丘校）では、隣接する国立病院機構三重病院に入院する児童・生徒が本校の小・中・高等部（普通クラス・重複クラス）に通学し、三重大学医学部附属病院に入院している児童・生徒が院内教室で訪問教育を受けている。年間約100名の転出入があり、常時40名程度が在籍している。

今回は三重病院の小児科と整形外科に入院している生徒のうち、準ずる教育課程で学習している中学部の取組である。入院期間は、病気の症状や程度によって1年以上になる場合もあるが、ほとんどの生徒は1ヶ月から半年の短期間で転出する。その短期間で生徒にどのような力をつければよいかを模索して取り組んだ実践である。

(2) 研究課題設定の趣旨

生徒は病気治療のために入院するが、地元の学校や家から離れ、病院という特別な環境の中で生活することになるので、不安に感じ、入院することをマイナスに捉えることが多い。しかし、生徒はこれまで病気を抱えて苦しんでいたこともあり、入院を機に、自分を変えようと決意していることも多い。そこで入院に対する見方を変え、入院をプラスに考えることで、生徒が主体的に学習して新しい自分になり、病気のためにあきらめていた未来に希望が持てるようにしたいと考えた。

その中で、国語科の学習指導として次のように考えた。人は言語によって自分や周りの状況を認識し、言語によって考えているから、言語能力の向上は学習の土台であるといえる。言語能力を文章の読解で向上させることで、自分で考え、主体的に学習する力をつけることができると考えた。そして想像力、思考力、表現力を高めることで、物の見方が広がり、自分や他者についての理解が深まり、新しい自分に成長できると考えた。以上のことから、研究課題を「入院生徒の言語能力向上と心の成長を目指す国語科の学習指導」として、実践した。

2 取組の内容

(1) 学習習慣の確立

- ・生活や学習環境を構造化して、主体的に学習する構えを作る。
- ・病棟生活の中に宿題を位置づけ、学習を習慣化させる。
- ・授業の約束を決め、毎時間学習目標を提示し、評価を行い、授業に集中させる。

(2) 言語能力の向上

- ・文章読解プリントを毎日継続して取り組ませる。

- ・アセスメントをして自分の力で簡単にできる段階から始める。
- ・小学校低学年の段階から中学校3年の段階までスモールステップで上げていく。
- ・文章の読解を通して語彙・漢字・文法・知識・理解力・想像力・思考力・表現力をつける。

(3) 想像力・思考力を高める授業

① 他者との意見交流の授業

- ・話し合いの授業で、何通りにも考えられる課題を与える。
- ・意見交流を通して、自分と他者とは見方や考え方が違うことを理解させる。
- ・他の視点を取り入れることで、多面的に物事を考えられるようにする。

② 文章の背後に隠された意味の理解を目指した授業

〈例〉中学3年「高瀬舟」(森鷗外)の授業実践

- ・庄兵衛の視点で書かれた文章を、視点を転換して喜助の視点から読解する。
- ・文章に書かれていないことを想像して、隠された意味を読み取り、見方を深める。

(4) 心を表現する作文指導

① 物語文の意義

- ・他者の物語を、自分が主人公となって、自由に想像し表現させる。
- ・他者の物語を自由に想像することで、自分の心に思っていることを象徴的に表現する。
- ・物語文を教材毎にテーマを変えて書かせることで、生徒の心の成長が見えてくる。

② 物語文と心の成長の分析

〈例〉中学3年女子の物語文と分析

- ・生徒は、現在の自分や過去の自分を見つめ直し、友だち関係や親子関係を見直し、新しい自分に成長していった。

3 成果と今後の課題

(1) 成果

今回の取組では、言語能力の向上を漢字や語彙、文法の学習に重点を置くのではなく、文章の読解を通して自分で考える力をつけることで行った。さらに授業での意見交流によって想像力、思考力を高め、文章の隠された意味を考えさせた。文章の隠された意味を、視点を転換して考えることで、他者の視点に立ってその内面を考えることにつながった。また物語を書いて自分の心を表現することは、心の中に隠されていた本当の自分を知り、自分の未来についてイメージすることにつながった。国語科の学習指導で、生徒が自分の力で主体的に学習し、他者や自分を理解することで、新しい自分に成長していくことがわかってきた。例としてあげた中学3年の生徒は、言語能力が向上し、自分の思いが表現できるようになり、対人関係が改善した。また治療によって病気も治り、入院した時とは別人のように成長して退院することができた。

(2) 今後の課題

入院する生徒は病気によって入院期間や登校期間に長短があったり、登校する時間や病棟での学習時間に制限があったりして、学習する時間が十分確保されているわけではない。またそれぞれの生徒の病気による特性や学力の程度はさまざまである。その中で、生徒が言語能力を向上させ、自分の力で主体的に学習し、自分を成長させていくためには、国語科の学習指導としてどんな取組をすることがより効果的かをさらに考えていきたい。

4 討議の柱

(1) 言語能力を向上させる取組について

(2) 入院生徒の内面に焦点を当てた学習の取組について

第4分科会

研究発表

発表者：奥田 孝治（滋賀県立守山養護学校大津分教室 教諭）
助言者：安達 眞一（全国病弱虚弱教育学校 PTA 連合会 事務局次長）
司会者：山登 美紀（滋賀県立守山養護学校大津分教室 教諭）

テーマ 「PTA 組織における後方支援活動のあり方について」

1 研究課題設定の趣旨

滋賀県立守山養護学校(以下、「本校」)は、昭和 63 年、滋賀県立小児保健医療センター(以下、「小保」)の開所に伴い、隣接地に開校された。そもそも小保は、肢体不自由児施設「滋賀整肢園」がルーツであり、その後、「滋賀県立小児整形外科センター」を経て、昭和 63 年 4 月、新たな診療部門を加えて「滋賀県立小児保健医療センター」としてスタートした。その際、学校はそれまでの肢体不自由養護学校から、病弱養護学校に変更された。

一方、大津分教室は、昭和 45 年、大津赤十字病院内の院内学級をルーツに、昭和 50 年、滋賀県立大津養護学校(病弱)として開校し、昭和 63 年、滋賀県立守山養護学校大津分校となり、その後、同校大津校舎を経て、平成 22 年 1 月 1 日、同校大津分教室となった。

何度かの改称や規模縮小に至る理由は、在籍児童生徒数の減少である。そのため、PTA 組織はあるが、学期に 2 回程度ある PTA 行事すべてを学校との協賛行事として教員主導で行うことで保護者の負担を軽減しているのが現状である。ただ、腎炎、ネフローゼ、喘息で 3～6 年ほどの長期療養が必要とされた時代の PTA 活動は活発であり、退院後も大津養護・大津分校・大津校舎(いずれも大津分教室の前身)の教育活動を後方から支援するため「大津養護学校教育後援会」が組織され、いまだに大津分教室の教育をサポートしてくれている。

「本校」にも教育後援会組織がある。賛助会員を若干名含むという点では純然たる PTA 組織とは言えないが、会員のほとんどを当該年度の配属教員と、在籍児童生徒の保護者で成り立っていることを考えると大津分教室の後援会と PTA を足して 2 で割ったような組織と言える。

前述の通り、大津分教室 PTA 活動は活発と言えるような状況にないが、類似の組織である 2 つの後援会組織まで解釈を拡大すれば、それぞれの歴史的経緯、大津校舎存続につながる署名活動など、他府県の病弱特別支援学校に誇れる実績は十分にある。したがって、本分科会では歴史的経緯を含む学校の概要説明、大津校舎存続の危機と回避、「本校」の将来構想上の課題などについて報告し、参加各校からは統廃合や PTA の要求活動などについて話題提供してもらうことで情報交流を図りたいと考える。

2 大津分教室での活動状況

(1) PTAの組織

役職	人数	役員の任務	選出の慣例
会長	1名	会務を総括する	年度当初、長期入院予定の児童生徒の保護者から選出
副会長	1名	会長を補佐し、会長事故ある時はこれに代わる	会長の子が転出後、長期入院予定の児童生徒の保護者から
庶務	1名	本会の事務を処理する	PTA担当の教員
会計	1名	本会の会計を処理する	PTA担当の教員
監査	1名	本会の会計を監査する	本校事務長

(2) 平成31年度の児童生徒数、会員数

	小学部	中学部	合計
児童生徒数	1	0	1
PTA会員数	1	0	1

(令和元年5月1日)

(3) 主な活動(平成31年度)

① 1学期

- ア レクリエーション大会(ボッチャ、ころがし卓球、スーパーボールすくい)
- イ 親と子のつどい(ソルト・キャンドル作り)

② 2学期

- ア 文化祭(マジック教室)
- イ 親と子のつどい(スノードーム作り)

③ 3学期

- ア 音楽鑑賞会(バイオリン)
- イ 親と子のつどい(クリアソープ作り)

3 成果と今後の課題

(1) 成果

- ① 大津養護学校教育後援会の有志による後方支援で、大津分教室が存続した。
- ② 守山養護学校教育後援会の有志による後方支援で、校舎問題が前進した。

(2) 今後の課題

- ① PTAの組織維持。
- ② 病弱単独養護学校の実態や課題を保護者とどう共有するか。

◎ 討議の柱

- 1 学校への後方支援活動の在り方。
- 2 PTA組織を維持するための工夫。

